



仮親^{かり}とひなのおはなし

ニッポンの初夏の風物詩、ホトトギス。夏鳥として日本に来て繁殖するホトトギスの仲間には、カッコー、ツドリ、ジュウイチがいますが、彼らはまた、ほかの種類の鳥の巣に卵をうみ、あとの世話をその巣の親鳥——仮親にまかせてしまう「托卵鳥」としても有名です。この連中に狙われるのは、ホオジロ、モズ、ウグイス、オオヨシキリ、ムシクイ類など。その

巣に、仮親の卵とそっくりの卵をうみ、卵は仮親の卵よりも早く孵化して、まだ孵化しない仮親の卵を巣の外へはうり出し、ヒナは巣と仮親からのエサを独占して、図のように仮親の何倍にも成長し、巣立ち後も一カ月も仮親の世話になつてから独立していくのです。托卵の習性が、どんな理由で、またどういういきさつで発達、進化してきたのか、いっぽう、托卵される側にも何らかの対策はないのか、これはいま難問中の難問です。ある先生は「自然の中は難問だらけ。この問題を究明するのは容易ではありませんし、たいへん長い年月がかかるでしょう。現在の私たちにとって大切なのは、まず、この自然をそっくり次の世代に引き渡すことではないでしょうか。」



ヒトの心に
「鳥の保護区」を

サントリー株式会社

財団法人 日本鳥類保護連盟

この愛鳥キャンペーンは、野鳥保護を通じて、環境と自然を守るこの大切さを知り、美しい地球を未来へつとめつという精神風土づくりを目ざし、これからは日本野鳥の会をはじめさまざまな自然保護団体の協力と支援を求めます。どうぞあなたのご支援を。次回は七月です。

トリからのメッセージ 112

21世紀へ このすばらしい地球の仲間たちをのこしたい